労働を詠む

機関誌『Meihoku』1500号発行記念特集

歌集『人定（じんてい）』（田中徹尾著）を中心とする名北労基短歌対談――下

対談者

語る人　田中哲夫氏（名古屋北労働基準監督署長）

号　田中徹尾

聞く人　石田幹夫（一般社団法人名北労働基準協会特別顧問）

号　石田みきお

石田みきお　もう5年になりますね。アメリカのリーマンブラザーズの破綻による世界同時不況はわが国の経済はもとより、雇用環境に大きな影響を与え「派遣切り」「採用内定取消」「整理解雇」「退職強要」など労働環境にさまざまな歪みを生みました。

新聞の投稿（入選）などにも

公園に背広の壮年けさもいて子らにリストラと噂されおり　石井照子
（読売新聞　枝折　H22・5・24）

失業保険もらっていると又聞きす息子哀しや山ぼうしの花　土屋美弥子
（朝日新聞　朝日歌壇　H22・6・28）

先生は職があるからさう言ふと職の決まらぬ学生の抗　小田部雄次
（朝日新聞　朝日歌壇　H23・8・8）

面接にけふも行く子が顔伏せて長くかかりて靴紐むすぶ　鈴木弘明
（読売新聞　読売歌壇　H25・5・6）

失業し金がないから棚経を読みに来るなと電話のかかる　岡田独甫
（朝日新聞　朝日歌壇　H22・9・6）

などが見られました。

総務省による平成24年の就業構造基本調査によりますと、派遣やパートなど非正規労働者は過去最高の2042万人と初めて2000万人を超え、労働人口の38・2％を占めていると発表しております。

歌集『人定』を振り返っていただきながら――労働を詠む――短歌について総括的なお話をいただければ幸いであります。

短歌で心情を表出する

田中徹尾　「花鳥諷詠」を詠むのが短歌だという誤解は、現代国語教育の弊害だと思います。

万葉集でもジャンルは「雑（ぞう）」「相聞」「挽歌」に分けられているのに、ひどい偏り方です。万葉集で、一番面白いのは大伴旅人の讃酒歌十三首でしょう。

あな醜（みにく）賢（さか）しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似む

このような「おかしみ」の大事さを国語教育は捨て去ってきたように思います。

さて、新聞歌壇の話です。新聞歌壇は特に時代の出来事に影響を受けます。たとえば、阪神大震災、9・11ニューヨークテロ事件、東日本大震災と大事件が起こるたびに新聞歌壇は確かな反応を見せます。俳壇とはここで流れを異にします。

まさに日本を代表する短詩型文学だといえます。欧米では、新聞に歌壇や俳壇があることに驚きを覚えるという話を聞いたことがあります。

労働の歌、といいますと、石川啄木を連想される方が多いと思います。

はたらけど
はたらけど猶わが生活（くらし）楽
にならざり
ぢつと手を見る

3行書きの元祖という位置づけです。名歌のひとつですね。

さて、リストラ問題が盛んに言われだしたのは、20年前のバブル崩壊後のことです。この間、新聞歌壇は、労働の歌をたくさん掲載してきました。取り上げていただいた新

聞歌壇などの歌は、確かに時代を反映した歌です。どきりとする場面を切り取る発見の歌です。抒情より主題で勝負する短歌の側面を表出しています。

その中でも、活躍をしたのは昭和32年生まれの長尾幹也氏です。平成6年朝日歌壇年間賞を受賞するとともに、平成12年には歌集『解雇告ぐる日』を出版し、サラリーマンの悲哀を衝撃的に表現しました。

決定せし上役よりも憎しみは命令下す我にそそがる

スマートな職を探すと部下去りぬひらがな多き辞表残して

告げしかばそくざに机整理しぬ解雇の部下のよりがたき怒気

解説する必要がなく、そのままの歌ぶりで鑑賞できます。

労働の歌といえば、私と同じ「心の花」所属・佐佐木幸綱門下の黒岩剛仁（たけよし）氏に注目をしています。黒岩氏は、私より五歳年下ですが、早稲田大学文学部出身で大手広告代理店の局次長経験者です。（現在は日本広告審査機構に出向されているとのことです）

短歌結社心の花では、佐佐木幸綱先生の補佐役として、編集部の中心である副編集長の重責を担っておられます。第一歌集『天機』、第二歌集『トリアージ』という二冊の歌集では、現職の社員として働く場面が多く詠われていて、現場で活躍する社員の機微が提示されています。歌を引用します。

タクシーの運転手殿に放屁され窓を開ければ夏来ていたり

『トリアージ』

歌人伊藤一彦が「ヒューマンで温かい」と絶賛した歌です。作者は、急いでいるからこそタクシーに乗ったのですが、この不始末。やさしい性格の作者は、運転手の無礼な行為にも、決して怒らずその場をやり過ごします。気持ちに余裕がありますね。前代未聞の放屁の歌なのに、読者には爽快感が伝わります。どちらかというと、現代勤労者の「へなぶり」を前面に出した歌です。

署長室で執務する田中署長

同僚の酔い始めたる眼にはつか違和兆すがに枇杷灯りたり

『トリアージ』

「はつか」は、「少し」または「わずかに」の古語です。場面の解釈が複雑ですが、仕事の打ち上げの場面だと思います。西東三鬼の「中年や遠くみのれる夜の桃」を連想します。

夏季休暇明けのメンバー多きゆえ長月の会議しだり尾となる

『トリアージ』

短歌を知らないと、発想出来ないイメージの歌。休暇明けの9月の会議が延びてしまうことを、イメージとして読者に伝えています。

信念を持っているかと問われたり卵のピザを食わんとせしに

『トリアージ』

これも、仕事を終えた後の同僚との食事の場面だと鑑賞しています。深刻なことに軽みを持たせ詩歌として成立させる技術があります。

他愛なきいさかいなれど徒らにこと荒立てし夜の湯豆腐

『天機』

もう一つ食事の歌です。夜の湯豆腐に焦点が当てられて、諍いの内容を具体的には何も言っていないのに、描写されています。

現代では、高齢化が進み、歌壇で労働を詠む人が激減しています。

しかし、自分の心情を表出したいと思う人は、たくさんいらっしゃると思います。

身近なところで、短歌を始めてみてください。時間も費用もほとんどかからないのが、よいところです。（完）

タイトル・浅井健史

◇　◇

本記事の掲載にあたり、田中署長をはじめ短歌掲載のご許可を下さいました作者の皆様に感謝申し上げます。（編集室）